

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特例後継承認第六二七号
令和四年三月一日発行（第百二十五巻第三号）

ホトトギス

三月号



風雅の小筥「五十」

廣太郎

先月ホトトギス発行所が丸ビルに事務所を移転した事を書いた。このビル、正式には「丸の内ビルヂング」という名称であり、ホトトギス社の登記もこの通りにしていた。「ビルヂング」という少し古風な響きにも感じるが、聞いた話ではあるがこれが商標であるそうだ。そういえば丸ビルに限らずこの辺りのビルは結構「○○ビルヂング」と表記されている。

何れにせよ丸ビルで営業を始めたホトトギス発行所であるが、やはり最初は、俳句雑誌という伝統的な業種が当時最先端の機能的なオフィスビルで事務所を構えるのに違和感を覚えた人が多かったという事である。ところが当の虚子は全く意に介する事なく平然と業務に携わっていた。これも聞いた話だが、反対の理由の一つに、ビルを形成するコンクリートが未だ乾いていないので、そこから毒ガスが発生する、という、時代を反映したとも言えるのかも知れない。

丸ビルの中では、結構部屋を移転していて、私も経験しているが、この当時の部屋番号を列挙すると、事務所を構えた当初は六二三区（号室では無く「区」となっている）。大正十三年十月六〇三区、大正十四年五月七二三区、そして昭和二年九月に八七六区に移り、この部夙が丸ビルの中では一番長期に渡って使用している。

今まで「ホトトギス発行所」と書いてきたのにお気付きだと思うが、実はこの部屋を使用している間の昭和二十二年九月二十七日に会社登記をして「合資会社ホトトギス社」となるのである。

廣太郎句帳 廣太郎

令和三年三月一日 カトリック新聞選者吟

房総に富士近づけて海苔を掻く
三月三日 NHK文化センター

雛飾る三百年の時空超え
温む水日差弾いてをりにけり
春光を纏ふ歩幅でありにけり

三月四日 蕉心会

閉ざされし園囁の湧き出づる
春泥を蹴つてよちよち歩きかな
木洩日といふ春光の句読点

走り根に春光に躓いてをり
園児等の声に弾けるしやぼん玉
蒼天に紅梅色を競はざる

蒼天に枝先絡め山茶黄
空の蒼橋の青春水の碧

三月六日 菅屋ホトギス会

春雪や富嶽を富嶽らしくして
穴道湖を恋うて蜩の呟ける
鳥帰る伊吹山巒深くして

句座ぬくし未来の女流大作家

三月七日 野分会菅屋例会

涅槃西風土の匂ひの濃かりけり
トーストを焦がす三月十日かな
十戒を糧に三月十日かな

三月七日 青嵐会菅屋例会

菜飯炊く美人女将といふ矜持

祖母の肩ふつかやいとのかつきりと
蘊蓄は塩にもありて菜飯炊く
ぐいと干すワイン仕上げは菜飯かな
三月八日 朝日カルチャー若草句会

蛇穴を出づれば人の居らざりき
大試験 天地の音鎮めゆく
俯瞰する羽田空港鳥帰る

暖かや再会叶ふ人と居る
路地一步より春泥に掴まれる
三月十一日 土筆会不在投句

はだれ野の砲声響き富士孤高
築八十五年の生家黄水仙
春めいて森の饒舌木の寡黙

三月十五日 北國文芸選者吟

蛭汁吸り潮騒聴いてをり
三月十八日 登高会

鯨群来見下す年尾句碑の黙
未来への言の葉紡ぐ春の川
葉隠れに香りの主張黄水仙

春の川六甲風鎮めゆく
庭園の黄水仙より明け初むる
黄水仙女子大生の袴触る

春の川命の目覚め促して
三月十九日 廣邦会

摘草や大地のアリア聴きながら
大川の水面凹ませ鳥帰る
鳥帰る未練の羽音奏でつつ

三月二十二日 朝日カルチャー若草句会コロナ枠

日の本の夜明は早し磯開

磯開波微笑んでをりにけり
山笑ふ周りの湖を従へて
董野のその一輪の囁きに
結界の一步に惑ひ山笑ふ
山笑ふ富嶽は黙を解かざる
三月二十三日 若水句会

陽炎の先の未来といふ虚ろ
苗木市古利華やぐ一と日かな
明日のこと判らぬ世界きぎす鳴く

陽炎に背奪はれゆくタワ
一鉢に視線集めて苗木市
三月二十四日 目黒学園句会

校庭の空風船に明け渡す
春塵を払ふ白亜のマリア像
もの芽に北国色の生れゆく

曇天に風船色を足してゆく
風船の割れて昨日を遠ざける
ものの芽によちよち歩き来て止まる

三月二十八日 青嵐会東京例会選者吟

涅槃西風黄泉の便りもその中に
春雨や都心に入を遠ざけて
気紛れな空は語部春めける

黄水仙狭庭に季節巻きをり
春の川蠢くものを潜ませて
三月二十八日 野分会東京例会ハイブリッド句会

鎌倉の古刹閉ざされ涅槃西風
銀に三月十日明け初むる
涅槃西風瀬戸の島々舐め尽し

三月三十一日 カトリック新聞選者吟

物芽出づ地球の空を清めつつ

雑詠 廣太郎 選

注文の名水で磨ぐ今年米 西宮 本郷桂子
 新米を炊けば湖の香沃土の香 同
 ヒマラヤの塩で新米握りたる 同
 知らぬ間と云ふ間を使ひ草虱 前橋 伊藤原志
 魂の輝く日和帰り花 同
 大綿の塵へと変はり身の早さ 同
 やれ笑へやれ走るなと七五三 神戸 藤井啓子
 何ひとつ悟られぬ身に達磨の忌 同
 立冬や因幡の人は風連れて 同
 枝の色に紛れ乾きぬ鴟の糞 八尾 山下美典
 錆鮎の澱みの暗さ辿り落つ 同
 凝り様が職人氣質松手入 同
 峰寺へいよよ近づく露の道 長岡 安原 葉
 兩名誉主宰は悲西虚子忌 同
 頬白の声と言ひきる一俳人 同
 北窓にこの風鳴れば冬仕度 西宮 海輪久子
 冬蝶にぶつきらぼうの風ばかり 同
 逃げやすき日を冬蝶のためにこそ 同

ひとすぢの芯あからさま滝涸るる 東京 田丸千種
 念仏の息の長かり十夜婆 同
 ひと筆に眉仕上りぬ木の葉髪 同
 追憶を辿りてまたも来し花野 加須 岡安紀元
 月深く沈めて鯉の眠る池 同
 妻画布に我は句帳を手に夜長 同
 ばんこつを耐へて米寿の夏終る 相模原 木村享史
 人流の途絶えたる闇みみず鳴く 同
 爽やかに米寿を生きてをれる幸 同
 夕暮を濡らして秋の時雨かな 袋井 湖東紀子
 秋深む雨の一日を見送りて 同
 窓を閉め灯を消し夜長始まりぬ 同
 野菊より小さき声聞く夕べかな 神戸 山田佳乃
 片腕の骨現はるる案山子かな 同
 秋蝶の翅に朝の空の色 同
 神の酒澄みをり人の濁酒 同
 砂時計音なく果てて十三夜 同
 鳥瓜大和の夕はかく暮れぬ 同
 なつかしきものに年尾忌温め酒 熊本 岩岡中正
 刹那とは美しきもの秋の滝 同
 本積んで時雨たのしくなりにけり 同
 硝子戸にひやりとふれて十三夜 龍ヶ崎 今橋眞理子
 後の月へとほどけゆく雲ありて 同
 ふたたびは窓の内より後の月 同

雑詠句評（二月号より）

片陰をシスター風のごとくゆく 渋川 木暮陶句郎

木立や建物の作った少しの日陰をシスター（修道女）は楚々と歩いているが、通行人たちは炎天下、汗を拭き拭き歩いている。シスターは、暑さなどまるで感じてはいないように、涼やかに通り過ぎた。修行の賜物なのか。「風のごとく」という措辞に、作者はシスターの日頃の清楚な生活ぶりから来る、凛とした姿勢を感じ取っているであろう。（さい雪）

日本にはそれほど多くおられる事は無く、最近では私服で過しておられるカトリックのシスターもおられるようだが、東京都心でも教会や修道院の近くである独特の服で歩いたり自転車に乗っておられるのを見掛ける。確かにあの服はひらひらと風に靡いている姿が凛々しく颯爽としている。（廣太郎）

夜学子の使ひ込みたる参考書 大牟田 平井裕子

灯火の下、より学ぶことに勤しめるこの季節に、夜学子の机の上の参考書が目に入る。使いならした程の参考書に勉強の努力の跡が見えて、是非ともその努力が実ることを願っている作者の暖かな眼差しが、夜学子を優しく包み込むかのようなのである。（雅）

秋になると受験がいよいよ近づいてきて、夜学をする学生が増えてくる。最近ではパソコンが主流なのかも知れないが、長年使い慣れた辞書や参考書はやはり使い勝手が良いものである。そんな使い込まれた参考書を見て、夜学子の苦労を愛情込めて見ている作者なのである。（廣太郎）

天地有情

心子選

優勝といふ喜びも爽やかに
 玄関を出て朝顔を観る日課
 師の句集校正夜長たのしみに
 病める師にいつも行き着くわが秋思
 豆飯に目覚めの早起厨かな
 豆飯を炊けば帰宅の早起夫
 限りなき露の光となり給ふ
 夙川の桜紅葉の風に住む
 未枯の中州に鷺の首伸ばす
 荻の風芒の風や川流る
 新走舌なめづりをな咎めそ
 ほろ酔で済むはずもなく新走
 やや寒きことにさへまた臆病に
 うそ寒や何悩むでもなく老いぬ
 今宵はも十一月の月蝕す
 今日はずぐ昔となりて夕時雨
 地謡なき能舞さびし十三夜
 この土と語る半生冬田打つ

長岡 安原 葉
 同 同
 相模原 木村享史
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 西宮 本郷桂子
 同 同
 鎌倉 星野 椿
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 香川 湯川 雅
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同
 神戸 和田華凜
 同 同

病窓の変らぬ景色秋の雲
 病窓の変る景色や秋時雨
 病窓の狭庭の明日はいかなるや
 玻璃ごしの小春日和の明るさよ
 とげ白くぼらの芽くれなゐを深め
 初午ののぼり一本路地の奥
 風に乗る日ざしとなりて爽やかに
 ゆく秋や会ひたしと言ひ交はしつ
 神は愛滝は光を惜しみなく
 木の実落つとき決心のやうなもの
 天平の雲 曳き正倉院小春
 銀杏の実弥陀の日向に拾ひけり
 咲き初めし庭の野菊を句座に活け
 老残の我が身を託ち秋深し
 因州の友より梨といふ便り
 廃業の湯屋の煙 突 鱈 雲
 声がまづ来て鶴でありにけり
 星流れあふるる程の願ひかな

東京 河野昭彦
 同 同
 同 高濱朋子
 同 同
 同 今井肖子
 同 同
 龍ヶ崎 今橋真理子
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同
 奈良 古賀しぐれ
 同 同
 東京 川口利夫
 同 同
 大阪 酒井湧水
 同 同
 袋井 湖東紀子
 同 同